

～2025 年度 ソニー幼児教育支援プログラム～  
〈科学する心を育てる〉

研究テーマ

自然から生み出す「ものづくり」の喜びがもたらす  
科学する心の芽生えとは  
～縄文に魅せられた子どもたち～



学校法人 仙台みどり学園  
幼保連携型認定こども園 みどりの森

# 目次

I.はじめに..... |

II.認定こども園みどりの森の概要と研究の背景..... |

(1)みどりの森の3つの保育目標

(2)保育の中で大切に考えていること

(3)本研究の背景

(4)みどりの森で考える科学する心とは

III.実践事例 自然から生み出す「ものづくり」の喜びがもたらす科学する心の芽生えとは  
～縄文に魅せられた子どもたち～.....2

(1) 研究の対象と方法

(2) 実践事例

- ①すごい見つけた!
- ②焼いたら、水が飲めるの!?
- ③大発見「こうしたら粘土に戻ったよ!」
- ④お日様にあたる方がいいんじゃない?
- ⑤土粘土の器は縄文時代から!?
- ⑥クラスみんなの関心事へ
- ⑦縄文の森探訪をとおして
- ⑧竪穴住居を作りたい
- ⑨いろいろな壁にぶつかる…
- ⑩2つの竪穴住居が完成
- ⑪大きな土器も作りたい
- ⑫新しい竪穴住居をつくろう
- ⑬大きすぎると危ない?
- ⑭由利さんからの問い
- ⑮みんなで考える  
～土に還るとは～
- ⑯みんなで考えた結論
- ⑰縄文の幸せとは?
- ⑱由利さんからの返信
- ⑲送りの儀式
- ⑳大きい土器の完成  
～自分たちの土器でつくるスープ～
- ㉑縄文のことを伝えたい
- ㉒丸太が見つからない
- ㉓丸太が見つかった…しかし由利さんからの新しい問い
- ㉔オレたち失敗しちゃった
- ㉕栗の木をどうするのか
- ㉖栗の木が到着



IV 研究まとめ..... | 3

(1) 科学する心が育つ時

- ①身近な自然の恵みを感じる日々の中で育まれるもの
- ②子どもの主体的な興味から始まる必然性の連続
- ③子どもの可能性の豊かさを信じる
- ④保育者も協働の探究者
- ⑤子どもを見守るコミュニティの中で

(2) 事例を通して考える科学する心の芽生えとは

(3) 今後の課題



## I. はじめに

みどり学園では、2008年から四度、ソニー教育財団幼児教育支援プログラムに論文を応募しており、その間一貫して「科学する心の芽生え」について考えてきた。

2008年度「ギンムシの正体を探れ！」の論文の中で正体を探った「ハンノキハムシ」。今も子どもたちは「ギンムシ」と呼んでおり、ハンノキの葉を葉脈を残して食べる虫としてお馴染みとなっている。園内の草木にやってくる虫の正体が分からない時には、様々な葉や木の枝などを実際に虫が食べる様子を観察する方法が受け継がれ、子どもたちが誰に言われるでもなく試す姿が見られている。また、この年度の最後に描かれた「みんながまもりたいちきゅう」の絵は食堂に飾られているが、この絵を見て、「こんなところに暮らしたい」と呟いた子どもの一言から、地球温暖化について、クラスみんなで議論したこともあった。

2013年度「カエルと一緒に暮らしたい！カエルプロジェクト」で作ったビオトープには、毎年カエルが卵を産む。オタマジャクシを各クラスで飼育し、カエルになると、「今後も飼うのか、池に放すのか」毎年のように議論になる。ビオトープやカエルの存在を通して自然の在り方を考えることが今も続いているのである。

2020年度、姉妹園のやかまし村の論文「このさかなはなんというさかな？けやきのもり水族館日誌」からも、環境は違っても特定外来生物や生態系ということについて、考えるきっかけとなり、毎年出かけていたザリガニ釣りをどうするか、釣ったザリガニをどうするかなど、子どもたちと一緒に迷い、悩みながらも直視しなければならない問題として学園全体で取り組んでいる。

これらは、ほんの一部であり、今までの研究成果が、園の文化として保育者、子ども共に受け継がれている。さらに、それを土台とした保育を通して、新たな課題に直面し、「科学する心」というテーマを軸としながら、自分たちの保育の在り方を問うというサイクルができあがりつつある。毎年、様々な形で年長児の事例を中心に論文をまとめて考察してきているが、今回、再度「科学する心」に焦点を当てて論文にすることにより、これまで積み重ねてきたものを確認し、新たな課題を見出し、今後の保育へと繋げていきたいと考えている。

## II. 認定こども園みどりの森の概要と研究の背景

### (1) みどりの森の3つの保育目標

- ① 自分がされていやなことは人にはしない。自分がしてほしいことはすすんで人にしてあげる
- ② 自分自身が地球の中の自然のひとつだということを感じられる
- ③ 人生における智慧を身につける

### (2) 保育の中で大切に考えていること

#### 子どもと自然との関わりを大切にする

認定こども園みどりの森では、開園以来、保育の中の体験の一つとして、自然体験活動を重要視してきた。その基礎となるのは、レイチェル・カーソンが著書「センス・オブ・ワンダー」※1の中で、子ども時代に持つ重要性を繰り返し述べている「神秘さや不思議さに目をみはる感性（センス・オブ・ワンダー）」である。園内の環境も、森を作ったり、木を植えたりしながら自然を豊かに感じられるように整えてきた。また、仙台市の市街地に近い環境ではあるが、園外の環境も利用しながら、子どもたちが自然の豊かさに常に触れられるようにと体験を重ねている。※1レイチェル・カーソン著「センス・オブ・ワンダー」新潮社、1966

#### 子どもの主体的な遊びを中心とする

みどりの森では、子どもたちは登園してから降園まで、心ゆくまでやりたい遊びをして過ごす。保育者は、子どもの興味関心に合わせて環境を整え、同じ目線で一緒に遊んだり、時に見守ったり、時に保育者の考えも伝えあいながら保育をしている。「主体的な遊びの中の学び」についても研究を重ねており、年長児では、子どもたちの興味関心から探究を深めていくプロジェクト活動を行っている。

#### 生活による保育

子どもたちの生活を大切にし、生活を通して保育を行っている。季節の野草や野菜、果実を調理したり、ニワトリを飼ってその卵を頂いたり、草木染めやたき火なども生活の中に取り入れている。生活に必要なことを自然の恵みから頂きながら、自分たちの手や身体を使って作ったり、整えたりしていくことを低年齢の頃から身近に感じながら生活している。

### (3) 本研究の背景

これまで積み重ねてきた研究を土台とした環境の中で、子どもたちが、周囲のヒト・モノ・コトに主体的に関わる姿が見られている。2024年度年長組の子どもたちは、年少・年中組の頃から土や泥に親しみを持っていた。年長組になると、園庭で土粘土を発見して土器作りに夢中になり、縄文時代の生活にも興味が広がって探究を深めていった。土や、木、縄などの自然の素材を使って、土器や竪穴住居などの「ものづくり」にじっくりと向き合う過程で子どもたちの中に芽生えた「科学する心」とは、どんなものであったのか。研究をすすめていきたい。

### (4) みどりの森で考える科学する心とは

子どもたちが、園生活の中で、興味関心を抱いたモノ・コトに対して、誰に急かされるでもなく、じっくり

と関わり、心を動かす。その過程で問いや工夫が生まれ、次の興味へと繋がっていく。さらにそのことを仲間と共有したり、共に課題を解決しようとする。この過程こそが「科学する心の芽生え」であると考えている。

子どもたちが夢中になってモノやコトに関わる環境作りと保育者の援助について研究を続けてきた。その中で、子どもたちの体験が「本物の体験」であることの重要性を確認してきた。また、年長児で行う探究型のプロジェクト活動の中で達成を目標としている「協働の学び」についても、体験を通して「意見の異なる他者との葛藤を乗り越えて、一つの真理にたどり着く過程」そのものが、「科学する心の芽生え」に繋がるものであることを確信し、保育を続けている。

それを踏まえて、ここ数年では、これまで培ってきた学びの継承を行うと共に、保育者自身も協働の探究者であるという意識を高め、保育に当たっている。

また、みどり学園では、「自分自身が地球の一部と感じられる」という保育目標を掲げ、これまでも「子どもと自然との関わり」を重要視して保育を行ってきたが、近年、地球規模の自然環境に対する数多くの複雑な問題に直面している現状があることをふまえ、幼児教育においても地球環境の持続可能性について考えることは、必要不可欠であるという実感を強くしてきている。これまで我が園で確認してきた「科学する心」を大切にすることを保育を行うことが、このことにおいても重要な位置づけとなっていることを2024年度「けやき組」の子どもたちとの一年の事例を丁寧に読み解きながら検証したい。

### Ⅲ実践事例

#### 『自然から生み出す「ものづくり」の喜びがもたらす科学する心の芽生えとは』 ～縄文に魅せられた子どもたち～

##### (1) 研究の対象と方法

認定こども園みどりの森の令和6年4月～令和7年3月までの実践事例をもとに研究考察を行う。本研究の実践事例の対象児は年長児〈けやき組〉(以下本文中ではけやき組と表記)男児17名女児18名計35名とし、研究考察を行う。

##### (2) 実践事例

###### ①すごい見つけた！(4月12日～)

けやき組の子どもたちは、年中組の頃に毎日のように泥だご作りや水対土と呼ぶ遊び(園庭の築山の頂上から水チームが水を流し、土チームは土を盛ったり、ダムを作って流れてくる水を堰き止める遊び)を楽しんでいた。年長組になったある日、ダムを掘っていたゆうのすけが、「すごい見つけた！」と興奮気味に話した。それは、今までには見たこともないような滑らかな土粘土であった。これまでも、水対土や泥団子作りで、「土粘土」を見つけていた子どもたちだったが、この粘土は、掘り出した後、少しこねると色々な形を作れることから、この良質な土粘土探しに夢中になった。



###### (保育者の思い)

子どもたちは、水対土や泥団子作りなどを繰り返し楽しむ中で、土や泥、水の感触を存分に味わうと同時に、自分の手や体を使って、試行錯誤する体験を十分に積むことができたと思われる。本園は、園庭内は穴を掘ったり、水を流したり、土を盛ったりすることが基本的にいつでもどこでもでき、安全に留意しながらも鉄のシャベルなど本物の道具も使用することができる。その上で、子どもたちが今、興味関心を抱いていることが何であるかにも注意を払ってきた。特に子どもが繰り返し取り組む遊びの中には、惹きつけられるものがあるということであり、保育者はその遊びを継続したり、広げたり、深めたりすることができるよう環境を整えた。年中組までの経験が基盤となり、土粘土の探究へと繋がったことが感じられた。

###### ②焼いたら、水が飲めるの!?(4月16日～5月23日)

子どもたちは、土粘土で器作りも始めた。そんな中、「これで水が飲みたい」と言いだした。そこで、保育者が、「焼いてみると水が飲めるかも」と提案してみた。これまで園庭でたき火をしてパンを焼いた経験があったので、その要領で、網の上に土器を置いて焼いてみることにした。しかし、ほとんどの器は焼いているうちに割れてしまった。唯一、ゆうの器だけ割れていなかった。「いいなあ、ゆう、水入れなよ」と仲間たちが見守る中、ワクワクした表情で、じょうろから水を注ぐゆう。しかし、水を入れるとすぐに器にヒビが入り、真っ二つに割れてしまった。ゆうはすっかり落ち込んで涙目になっていた。そこで、クラスの本棚から参考になる本がないか探してゆうと一緒に調べてみた。「やきものの絵本」※2に「成形後、乾燥させる」と書いてあった。「乾燥させてなかったからかもしれない」と、数日乾燥させてから焼いてみたところ、見事、割れずに焼けたのである。はじめは、焼きあがった皿を耳の傍で叩き、「本物の皿の音がするよ」と嬉しそうに呟いた。「水、入れてみよう」と子どもたちは、恐る恐る水を入れてみていたが、割れない。「やった！」と大喜びで何杯も水を飲んで「おいしい！」と言っていた。

※2 吉田明編「やきものの絵本」農文協出版,2008



ほとんどが割れてしまった



水を入れてみる



水を入れると割れてしまった

### (保育者の思い)

保育の中で火を使うことも、日常的に行っている。生活を通した保育を大切にすることで、火を使うことは、体験の幅がぐんと広がる。子どもたちが土粘土を探すだけでなく、様々な形に成形して楽しむ様子から、興味の深まりが感じられた。そこで、これまでの保育者の知識から、器を焼いてみることを提案した。始めは、「やってみよう」という実験的なことだったため、事前に調べることをせず、子どもたちの意見も聞きながら、焼いてみた。普段から、上手いかないことがあっても良いと考えているが、子どものがっかりした表情を見ると、心が揺れる。そして、今度こそ成功させたいから、「調べてみよう」と保育者も真剣に子どもと一緒に調べることとなった。器で水を飲むことに成功した子どもたちの笑顔を見て、保育者も一緒に嬉しくなったのである。



扇いだら早く乾くかも

水、おいしい!



### ③大発見「こうしたら粘土に戻ったよ!」(6月18日)

毎日のように掘り出している土粘土だが、数日経つと固まって使えなくなる。けんしろうは、「水入れて練ったら、また粘土に戻るんじゃない?」と水を入れて練って見ていたが、水と粘土は分離したままで、元に戻らなかった。しかし、ひなた、ちなみ、かおるがままごと遊びの中で、「大発見をした!」と嬉しそうに報告に来た。この3人は、普段からレンガや石を砕いてふるいにかけて粉状にし、土で作ったケーキなどに振りかけて遊んでいた。そして、固まった土粘土も同じ要領で砕き、粉状の粘土に水を入れてみたところ、粘土に戻ったと言うのだ。さらにこの方法で作った土粘土は、掘り出したままの土粘土よりも滑らかで使いやすい土粘土であった。保育者が調べてみると、プロの陶芸家もこれに近い方法で良質な粘土を作っていることが分かり、驚かされた。この方法を知ってから、子どもたちは、掘り出した土粘土はすぐに使わず、あえて乾燥させてから割ってふるいにかけて使うようになった。りゅうせいは、「採った土粘土を乾燥して粉にして土粘土になって、また乾燥して…って繰り返してる!」ゆうのすけも「土粘土って何回も繰り返してる。面白いね」と話していた。



ままごと遊びの技術を土粘土に応用

### (保育者の思い)

この大発見は、偶然であった。しかし、我が園では、遊びと遊びがこのようにつながることがよくある。日頃から、「この玩具は〇〇で使う物、使い方はこうすること」という約束事は、極力作らないようにしている。今回も、レンガや石をトンカチで割るという遊びを日頃から楽しんでいたからこその発見であった。子どもたちは、モノとモノをどう組み合わせたらもっと面白くなるか、この道具をどう使ったらいいものができるか、無用のルールに縛られることなく、柔軟に考え、試している。保育者は、その一つ一つに心から感心し、「それ、どうやってるの?」「よく考えたね」「おもしろいね」と言葉を掛けているのである。

### ④お日様に当たる方がいいんじゃない? (6月18日~)

それからは、良質な土粘土作りが子どもたちの日課となった。作り始めの頃、バケツの中に入れて数日放置した土粘土を子どもたちが「そろそろ割ってみよう」とトンカチで割ってみるが、ヒビは入るが上手く割れない。粘土の塊をひっくり返してみると「なんだ、下の方は、まだ土粘土のままじゃん(乾燥してない)」と気が付いた。「広げたら?」とゆうのすけ。そこで、鉄板に薄く粘土を広げて乾かしてみることにした。はるたかが、「お日様が当たる方がいいんじゃない?」と、薪置き場の屋根の上に置いてみた。数日後、トンカチで割ってみると、気持ち良く割れ、「これ、いいんじゃない!」と、より良い乾燥方法を思いつき、嬉しそうだった。さらにはるたかが、「粘土焼いてる時に、燃えないくらいの火の近くに粘土置いておいたら早く乾くんじゃないかなあ」と意見を出した。これまで焚火などを薪が湿っていると近くに置いて乾かしていた経験から思いついたのではと思うが、他の子どもたちも「なるほど」と納得する姿があった。



順調に割れてはいたが、粘土を割っていると、粘土の破片が激しく飛び散ってしまう。すとははじめが、「(トンカチの) こっちの方で割ると飛ばなくなったよ」とトンカチの面の広い方で割って見せた。さらにまどかが、「グルグル回すといいかも~」と割れた後にトンカチで潰すように粘土を粉々にしていった。りくは「割る時はこっちの方(トンカチの尖った方)がいい。後はこっち(広い面)」と後から来た子にも教える姿があった。



割れた粘土をふるいにかける作業でも、はじめは「2回ふるいにかけたら、もっとよくなるんじゃないかな?」と一度ふるいにかけた粘土をさらにふるってみる姿も見られた。

皿などを成形する過程でもこの粘土作りの作業から、新しい試みが行われるようになった。土粘土の柔らかさを調整するために水加減には注意を払っている子どもたちだが、「水入れすぎたかも」と言うこともある。いちかは、「柔らかすぎると、固まるまで(乾燥するまで)待たなきゃいけないんだよね」と言っていたが、粘土作りの過程で粉状になったものを「これ振りかけてみよっか



な」と試していた。すると、表面の水気がなくなり、丁度よい固さになったようだ。いちかはゆうのすけに、「どう？」と粘土を見せながら聞き、ゆうのすけは、「べちゃべちゃすぎるとダメだよ。すべる？」と言い、いちかの土粘土の表面をなで、「うん、すべるね。いいんじゃない？」と言っていた。いちかはゆうのすけに認められ、嬉しそうに動物の形を作り始めていた。

#### (保育者の思い)

子どもたちは、もっと良い粘土作りの方法はないかと、日々、工夫する姿が見られていた。そんな中で、担任保育者のうち、粘土作りにはほとんど関わっていなかった保育者もこの盛り上がりの中、やってみようと思っ様見真似で始めてみた。しかし、まだ乾いていない粘土を割ろうとしたり、トンカチで叩くと思切り粘土が飛び散ったり、水を入れすぎてびちゃびちゃになったり…まさに子どもたちが既に経験済みの失敗を次々としてしまい、子どもたちに「ちがうよ〜」「あ〜あ、貸してみな！」とその都度アドバイスをもらいながらの作業となった。子どもたちが、仲間と共に試行錯誤しながら土粘土作りの技術を身につけていたことに感心したのであった。

#### ④ 土粘土の器は縄文時代から!? (6月)

子どもたちが、繰り返し作っていた素焼きの器は、「土器」と呼ばれること、そのルーツは縄文時代に遡ることを伝え、「縄文人の暮らし①」※3の本を見せてみた。すると、子どもたちは予想以上に興味を示し、「ほんとだ!土器つくってる」「イノシシとか食べてたんだね」「自分たちで家とか作ってる」「近くに川があるんだね」などと、本の隅々まで見ていた。さらに、「こんなふうに暮らしてみたい」「少しずつ、昔みたいに戻ってみたい」と言う声も聞かれた。また、本の中で「野焼き」と呼ばれる穴を掘って土器を焼く方法を知り、その方法で焼くようになって、より一層上手く焼けるようになってきた。※3 本山浩子著、宮原武夫編「縄文人の暮らし①」汐文社、2009



食事中も熱心に本を見る

#### (保育者の思い)

年少・年中組の頃から、散歩などに出掛けると、自然の中でいくらかでも遊ぶ子どもたちであった。さらに、細かな手仕事や基地作りなどを繰り返し楽しむ姿も見られていた。土器が縄文時代にルーツがあることは知識としても知らせたいとは思っていたが、それだけでなく、縄文時代の暮らしの中に見られる手仕事などが子どもたちの興味を引くかもしれないという思いもあって縄文の本を見せた。子どもたちの反応は保育者の予想以上であった。しかし、保育者自身に知識がなければ、環境を作ることが難しい。そこで、教材研究はできる限り綿密に行った。文献などを読むだけでなく、縄文遺跡を巡ったり、ガイドの方に質問をしたりして知識を増やしていった。「こんなものもあるよ」と知らせる中で、子どもたちが「やってみよう」と思うことに取り組んでほしいと思っていたのである。

#### ⑥ クラスみんなの関心事へ (6月21日~)

子どもたちは、縄文の本を見て、土偶にも興味を示した。年長組が園に1泊するお泊り会(7月13日・14日)が近かったことから「土偶を作ってお泊り会の成功を祈りたい」と言い、いくつも土偶を作っていた。「お泊り会で食べるカレーは土器で食べたい」「土器で水飲みたい」などと話す子もおり、これまで熱心に土粘土に関わっていた子だけでなく、クラス全体に土器や土偶作りが広まり、縄文のことがクラス全体の関心事になっていった。その中で、これまでずっと土器作りに関わっていた子どもたちが、慣れていない子に、「練るといろんな形になりやすいよ」「水つけて、水つけすぎたら、粘土の粉つけてってやるといいよ」などと教える姿が見られた。友だちの粘土を見ながら「やっとな〇〇の粘土みたいになってきた」と上手な子を真似ようとする子もいた。



#### (保育者の思い)

本園では、年長組になると子どもの興味関心から、協働で一つのことを深く探究する活動を行っている。子どもたちが、本当に何を面白がっているのか、慎重に見極めるようにしている。そんな中で、この土器・土偶に対するクラス全体への興味の広がり、探究のテーマになり得るのではないかとこの時期考えていた。と言っても、クラス全員が同じことをするのはではない。それぞれが「やりたい」と思ったことに取り組んでいく中で、仲間からも認められ、やがて集団の関心事が一人一人にとっても大事な関心事となり、協働の学びとなっていく保育を目指している。

#### ⑦ 縄文の森探訪をとおして (9月18日)

子どもたちにとって、土粘土で作る土器や土偶と、本で見る竪穴住居や暮らしの様子だけが、縄文のイメージであり、「やってみよう」も子どもによって差が生じていた。そこで、仙台市の縄文遺跡の施設「縄文の森」に見学に行くことにした。子どもたちは、縄文時代を再現した庭で走り回って遊んだり、出土された大きな土器や復元した竪穴住居を見て大いに刺激を受けたようだった。また、施設の職員の方に、「質問はありますか?」と聞かれると、次々と質問をしていた。質問内容は以下のようなものであった。



質問タイム



竪穴住居で寝てみる

「粘土はどうして土の中から出てくるんですか?」「土偶はどうやって作ってたんですか?」  
 「土器の色はなんで違うんですか?」「縄文土器の模様はどうやってつけてるんですか?」  
 「土器の模様はどうしていろいろなんですか?」「レンガは縄文時代にありましたか?」  
 「粘土に葉っぱも入れて土器を作るんですか?」「お家の中でどうやって寝てたんですか?」  
 「縄文時代の人の服はどんな服でしたか?」  
 「縄文のことはどうやってこんなに分かったんですか?」

その一つ一つに丁寧に答えてもらい、それを聞いてさらに質問が出る。子どもたちの興味関心の高さが伺えた。

### ⑧ 竪穴住居を作りたい (9月18日)

縄文の森から帰ると、その日の午後、男児たち数名が園庭に穴を掘り始めた。「竪穴住居をつくる」と言うのである。縄文の森で、復元された竪穴住居を見たことで作りたい気持ちが高まっていたのであろう。翌日は雨が降ったが、竪穴が気になって仕方がない様子で、何度も竪穴を見に行き、結局は雨に濡れながら穴掘り作業をしていた。

それを見ていた女児たちも、「わたしたちだって、作りたい」と別に穴を掘り始め、けやき組で園庭にそれぞれ2つの竪穴住居建設が始まったのである。



雨が入らないよう被せていたシートを外して作業開始



雨の中、穴掘り作業

#### (保育者の思い)

縄文の森から帰って、子どもたちがその日のうちに竪穴を掘り始めたことには驚かされた。子どもたちは、今すぐにやりたいのである。保育者は、できるだけ子どもたちの「今やりたい」が実現できるようにと考えてきた。特に、この「やりたい」が本物である場合は、保育者が環境を万全に整えていなくても、やり始めるものである。そんな場合はむしろ、保育者がその行動を肯定的に見守ることが一番の援助になると考えている。年少組の頃、子どもたちは、「やりたい」と思ったことでも保育者の了解を得ないと動かなかったり、表情を見るところがあった。その都度「やってごらん」「どんなことになるのか見てみたい」という気持ちで見守ることを大切にしてきた。縄文の森から園に戻ってきた子どもたちが、誰に了解を得るでもなく、当たり前のように園庭に飛び出して行って穴を掘り始めたことは、年少組の頃からの積み重ねを思うと嬉しい出来事であった。

### ⑨ いろいろな壁にぶつかる… (9月~12月)

竪穴住居作りは、それから4カ月ほどかけて、作りたい子が作りたい時に集まって進めていった。縄文の森の竪穴住居の記憶と本の写真を頼りに作っていく作業は、一筋縄ではいかなかった。しかし、その度に子どもたちは、「これがダメなら、こうしてみたらどうか」と考え、試行錯誤を繰り返し自分たちなりの竪穴住居を作っていた。

**柱が立たない** 竪穴を掘り終わると、子どもたちはまず柱を立てようとした。最初は、「トンカチで叩いて、埋めたらいいよね」と言っていたのだが、りゅうせいが、「縄文には鉄はないって(縄文の森で)言ってたじゃん」と言い、たけるが「じゃあ、石で叩くのは?」と提案し、「いいね」と一人が木材を支え、一人が上から石で叩いて木材を土に埋めようとした。しかし、何度石で打ち付けても地面には全く埋まらない。「全然ダメだね」と声があがる。するとあゆむが「埋めるのは無理だから、粘土で周り固めれば?」と思いつき、土粘土で柱を固めたところ、無事、柱が立った。



写真を見ながら作る



石で叩いて埋めようとする

**柱が短くて立って入れない** 本や写真を見ながら、4本の柱を立てた子どもたち。しかし、思ったより、その柱が短かったため、このままだと天井が低くなってしまいうことに気付いたようだった。「どうすんだよ。もっと長い柱なきゃ無理じゃん」と一時竪穴住居作りは中断となった。しかし、翌日、どうしても諦めきれない様子で竪穴住居に数人が集まっていた。すると、ゆうが、「柱が短いなら、穴をもっと深く掘れば、天井も高くなるんじゃない?」と言いだした。「そうかも!」と再度やる気を出した子どもたち。もう一度穴を深く掘り、自分たちが立って入れる高さを作り出した。



自分たちの背より低い

**竪穴内に雨が侵入** 当初、雨が降るたびに竪穴内に雨が浸水していた。子どもたちは、その度にバケツでかき出したりしていたが、追いつかない。すると、まなどが「オレ、水路掘ってみる」と水路を掘り始めた。それを見て、多くの子が協力し、水路を作った。すると竪穴住居には水が入らなくなったのである。女児たちの竪穴住居の周辺にも、いつの間にか水路が掘られており、それぞれ話し合った訳ではなかったが、これまでずっと水対土などで水の流れ方について知っていた子どもたちは自然とその方法に辿り着いたのだと感心させられた。



水路を掘って雨対策

**材料が足りない** 竪穴住居の材料集めには、特に苦勞した。園内にも、基地作りなどを楽しめるように普段から丸太や端材は用意している。ふみは、流しそうめんの時に使った竹を見つけ、引っ張り出してきて驚かされた。しかし、それらをかき集めても全く足りなかった。そこで、農家さんで田んぼの稲架掛けに使用していた栗材や、職員が家庭の庭木の剪定をした際の枝を譲ってもらったりした。木の皮は特に難しく、他クラスの保護者が仕事で扱っているからと好意で持ってきてくださったこともあった。子どもたちは「探しに行こう！」と言い、園周辺に探しに出かけ、袋に詰めて持ってきたこともあった。最後は、みんなで話し合い、園のバザーにけやき組で縄文のアクセサリなどを作って出店した際の収益金は、全て、杉の皮を購入することに使うことを決めた。



バザーの収益金で茅店さんより杉皮購入



### ⑩ 2つの竪穴住居が完成 (12月5日)

いろいろな苦勞はあったが、子どもたちは楽しみながら2つの竪穴住居を作り上げた。それぞれの竪穴住居は形も作りも違っており、お互いに自分たちの竪穴住居を自慢し合っていた。時には、それが白熱して、「オレたちのほうが、雨が入らないし、強いよ」「わたしたちの方が広いもん。そっちは狭いでしょ」などと、言い合いになることもあった。しかし、いざ冷静になると「そっちの竪穴は形きれいなんだよね」「オレたち狭くなったのって、柱の周り粘土で固めたからだと思うんだよね」「もう1回作りたくな」などと話していた。そこで、みんなで話し合い、2つの竪穴住居の良いところを合わせたもっと素敵な竪穴住居を作ろうということになったのである。



#### (保育者の思い)

子どもたちは、自分たちのやると決めたことだから、様々な困難な状況があってもあきらめずに試行錯誤していた。子どもたちの考えは、保育者も思いつかないような発想がたくさんあったが、その一つ一つが以前の経験から繋がっているのだらうと思うものが多く、豊かな経験の大切さを実感させられた。

### ⑪ 大きな土器も作りたい (9月~3月)

竪穴住居作りと並行して、土器作りも続けていた子どもたち。縄文の森で見た、自分たちが作っているものとは比べ物にならないくらい大きい土器を目標にし、「もっと大きい土器を作りたい」と土器作りでも試行錯誤することとなった。

**輪積み式で土器を作る** 保育者が遺跡巡りをした際、土器作り体験ができ、その中で、紐状にした粘土を輪積みしていく方法を習った。そこで、子どもたちにもこのやり方を伝えてみた。子どもたちは、「4段積めた!」「今度は5段に挑戦!」と張り切って輪積み数を増やそうとするのだが、段数が増えるにつれ、どうしても重みで崩れてきてしまう。はるたかは、「水の量が関係あると思うんだよね。作る前にすぐちょうどいって水の量が作らないと」「ゆうのすけは、「形が関係あると思う。本だと、下の方が小さくてだんだん大きくなる形になっているけど、オレたちのって全部同じ大きさ(寸胴)はじめは、「縄文の森で、葉っぱとか粘土に混ぜてたって言ってたでしょ。混ぜてみようよ」と言って、実際に何度も違う条件で試した。しかし、何をやっても上手くいかないのがあった。



**作るのが楽しいから...** 子どもたちは、自分たちが思うような大きさの土器がなかなかできないにも関わらず、土器作りを続けていた。保育者が、「土器作ってる時って何考えてるの?」と訊ねたことがあった。するとあんは、「土器作ってる時は楽しいから、何にも考えられないよ」げんは、「粘土ってきもちいいな~って思ってる」と話し、ゆうのすけは、「土器作りもドッジボールと同じじゃない? あきらめないこと」と話していた。子どもたちは、結果ではなく、土器を作る過程そのものに楽しさを見出しているのだと感じることができた。



現時点の最高記録

### やってみる前に推測できる

毎年のけやき組の行事で、陶芸教室がある。その際、陶芸の先生には、子どもたちも前のめりて色々質問していた。その際、やはり「大きい土器はどうやって作るんですか？」という質問も出た。陶芸の先生も悩んだ表情で、「う〜ん、縄文の人もすごく難しかったと思うよ。先生は穴を掘って、型を作っていたんじゃないかと思うな」と教えてくれた。子どもたちは、その後すぐにそれを試そうとしていたが、「どこに掘る？」と保育者が聞くと、はるたかは「乾かさなきゃいけないから、雨が当たらないところだね？遊具の下とか？」と言う。しかし、まなどが「でも、雨って地面に染み込むんだから、遊具の下も乾かないんじゃない？」はじめが「それじゃ、どっからが穴でどっからが土器かわかんないじゃん」と言い、ゆうのすけが、「わかった！縄文人は竪穴住居の中に土器用の穴作ってたんじゃない？」と言った。はじめが、「じゃあ、新しいオレたちの竪穴作る時は、土器の穴も作るってことで。今はできないよね」と言い、今はできないという結論になった。これまで、子どもたちは保育者が何を言っても「やってみないとわからない」と試す姿を遅いと思っていたが、さらにそれを越えて自分たちでやってみる前に推測し、それは今は難しそうだと結論を出したことに驚かされた。



たくさん作った土器

### (保育者の思い)

この時期、土器作りに関しては、保育者は頭を悩ませていた。子どもたちは試行錯誤して、大きい土器を作りたいと頑張っている。それなのに、どうしても上手くいかない。前述したように、もちろん成功することだけが良いとは考えていないのだが、刻々と時間ばかりが経っていき、これはもうここで限界なのだろうか？と弱気になることもあった。しかし、子どもたちは違っていた。決してあきらめることもなければ、落胆することもない。その様子を不思議に思って尋ねてみると、「作るのが楽しいから」「粘土が気持ちいいから」と話した。子どもたちは、結果にこだわることなく、土器を作る過程そのものを楽しんでいたのだ。さらに、まるで保育者を励ますように、「土器作りも、ドッジボールと同じ、あきらめないこと」と教えてくれた。実はその時期、子どもたちはドッジボールにも夢中になっていた。その中で、「試合に勝っても負けてもあきらめなかった方が勝ちだよ」などと保育者も言っていたのである。子どもたちは土器作りを通して、とても大切なことを感じ、学んでいたのだ。

### ⑫新しい竪穴住居をつくろう (1月21日)

「もっと立派な竪穴住居をつくりたい」という子どもたちの思いを受けて、保育者間では、園生活最後の子どもたちの願いになるだろうから、叶えてあげたいと話合っていた。そして、建設場所の確保のため、冬休み中に古くなっていった倉庫を解体した。

子どもたちは、更地になった空間に大喜びで、すぐに竪穴を掘り始めた。穴はあっという間に大きくなり、げん、こうき、りゅうせい、あゆむ、かんたろうで竪穴の真ん中に太い竹を立て始めた。前に作った竪穴住居は、粘土で固めたせいで狭くなったからと、今度は穴を掘って柱を埋めていた。そのため、しっかりと柱が建っており、保育者は驚いた。しかし、それを見たはるたかが、「柱は真ん中に建てるんじゃないくて、端っこに4本建てたい！勝手にやらないで！」と言った。他の子どもたちも集まってきて「今度はみんなの竪穴なんだから、みんなでどんな竪穴住居を建てるか、決めてから建てよう」と言ったので、みんなで話し合うことにした。

まずは、これまでに作った竪穴住居の良かったところを出し合うと、「女の竪穴は、広かった」「男の竪穴は丈夫だった」「だから、今度の竪穴は、いいところを合わせて、広くて丈夫にしたい」「けやき組が学校に行ってもずっと残ってる思い出にしたい」という意見が出た。



### ⑬大きすぎると危ない? (1月22日~1月28日)

何度も話し合いながら、設計図や模型などで、作りたい竪穴住居のイメージをクラス全員で共有し、どのくらいの大きさにしたいか、メジャーなどを使って測定した。そして、園長に子どもたちの希望のサイズを伝え、「立派な竪穴住居を作りたい気持ちは分かるけれど、卒園記念のように長く残すものを作るとなると、安全面の問題が出てくるのでは」ということになり、保育者には知識がなく、姉妹園のやかまし村の設計士で、園の改築や増築にも毎回関わってもらっている由利さんに相談することにした。そのことを子どもたちにも伝え、「確かに小さい子がケガしたりしてほしくない」と言



・崩れたりしない丈夫な竪穴住居を作りたいけど、どうすればいいですか？

・自分たちが小学生になってもずっと残るような竪穴住居を作りたい。縄文の森では、3日に1回くらい竪穴の中で火を焚いて燻していた。自分たちは小学生になっちゃうからできない。木は湿気があると黒くなって腐っちゃうから弱くなっちゃうかも。どうしたら腐らないですか？

を質問することにした。

### ⑭由利さんからの問い (1月29日)

お忙しい中、由利さんが翌日には園に来てくださった。早速、昨日考えていた質問をしてみると、由利さんから逆に質問を頂くことになった。

由利さん「みんなが、本当に大事にしたいことは何かな？それによって、絶対に叶えたいことと、あきらめなくてはいけないことも出てくるんだよ」

「みんなはずっと長く堅穴住居を残したいんだね。でも、堅穴住居も、いつかは壊れるんだよ。人間もそう、何でもそうだけどね。僕は、お家を建てる時に、縄文時代みたいに行けるだけ最後は土に還る材料で作りたいと思っているよ」

「みんなは、縄文時代とおんなじような堅穴住居を作りたいんだよね？でも、それだと、あまり長くは持たないかもしれない。それに、絶対に崩れてこないとも言えないんだよ。ただ、縄文時代には無かったけれど、屋根に防水シートをかけたり、コンクリートを打ったりして長く持たせるようにすることはできる。でも、それは土にはかえらないよ」

「みんな、本当に何を大事にしたいかを考えてね」



### ⑮みんなで考える (1月29日)

由利さんが帰った後も、話し合いは続いた。

保育者「コンクリートや防水シートを使っても長く残る堅穴住居にするか、早く壊れてしまうかもしれないけど縄文時代と同じ材料で作るか、みんなはどっちを大事にしたい？」

子「長く思い出が残ってほしいから、コンクリートとか防水シートを使いたい」

～賛成意見が続く～

ゆうのすけ(ずっと考えていた様子で)「コンクリートは使いたくない。だって土に還らないんでしょ？」

～みんなの表情が変化したように感じられた～

保育者「土に還るってどういうことなんだろうね？」

ゆうのすけ「土の栄養になるってこと」～多くの子がうなずく～

ゆうと「土がないと、種を植えても育たないもんね」

まなと「食べ物もなくなっちゃうよ」

さくた「コンクリートをどんどん捨てたらゴミだらけになって、新しい土はできないよね」

のぞみ「やっぱりコンクリートは使いたくない」

～賛成意見が増える～

けんしろう「でもやっぱり思い出を長く残したい。コンクリート使っても」

保育者「一日考えてきて、大工さんを頼むなら明日までだから朝一でまた話し合いをしよう」



### ～土に還るとは～

由利さんは「土に還る」と教えてくれたが、子どもたちはこれを当たり前のように理解していた。それは、このクラスの子どもたちが、年少・年中組のころから、下記のような体験をしていたからなのである。

年少組の頃、部屋でミミズを飼っていた。保育者が、土を湿らせたり酸素を入れるために土をかき混ぜていると、誰かは見に来て「ミミズ触りたい」「ぼくもやりたい」「ミミズの餌もってきてあげる」と言って関わっていた。散歩先で取ってきた虫が死んでしまった時には、「ミミズの土にいれてあげよう」と土に埋め、保育者が「ミミズの土は栄養たっぷりなんだよ」「この土の中にはね、ミミズとか、見えないくらい小さい虫がたくさんいて、死んじゃった虫を食べてくれて栄養のある土にしてくれるんだよ」と教えていた。春が近づいた頃、男の子たちが、来年自分たちが使う予定の畑にせっせと枯れ葉をすき込んでいた。「なにやってるの？」と聞くと、「ちっちゃい虫が食べてくれて、いい土になるから」と言って、半分土に還りかけている黒ずんだ葉を選んで一輪車に乗せ、みんなで協力して運んでいた。

年中組の時には、飼っていたカナヘビが死んでしまった。すると、「土に還してあげなくちゃ」という声がたくさん聞かれた。「土の中の小さい虫が食べてくれるしね」「栄養にしてくれるしね」と口々に言っていた。なおが、「生まれたところの土に還りたいんじゃない？」と言い、カナヘビを捕まえた公園の土にカナヘビを埋めに行った。みんなで手を合わせた後、はじめが「種見つけたよ！」と種を持ってきて、「ここに植えよう」と言った。するとこよみが、「カナヘビの土が栄養になって、種から花が咲くもんね」と言ったのである。

子どもたちは、小さな頃から繰り返し「土に還る」を理解するような経験をしていたのだ。



ミミズを触る年少組の頃の子どもたち

### (保育者の思い)

子どもたちがこれまで試行錯誤しながら堅穴住居を作ってきて、その経験を元にもっと立派な堅穴住居を作りたいと言った時、その願いを叶えてあげたいと思った。しかし、由利さんの言葉を聞いて、ハッとさせられた。子どもたちにどんな経験をしてほしいのか、一番大切なことは、目に見える結果や形ではなかったはずだ。そう思いながら、子どもたちの意見を聞いていた。ゆうのすけがじっくり考えた末に「土に還らないからコンクリートは使いたくない」言い、それを聞いて周りの子どもたちも真剣に耳を傾け考え始めた。この姿に、保育者は子どもたちがどんな結論に達したとしても、この経験こそが大切なのだと感じることができた。

### ⑯みんなで考えた結論 (1月30日)

翌日。みんな真剣な表情で集まって、また話し合いが始まった。

まなと「考えたんだけど、竪穴の思い出を残したいんだけど、土に還るなら、竪穴住居が壊れても土の中に残るってことなんじゃない？」  
さくた「その土から新しい木が生えるかもしれないし、そうしたら新しい竪穴住居もできるかもしれないもんね」  
けんしろう「オレも、やっぱり、コンクリート使いたくなくなった」  
～賛成意見が続き、「壊れても安全なぐらいの大ききで、全て土に還る材料で作る」ということに決まった～

実は、話し合いはそれで終わらず、「縄文人は自分たちで土器や家を作ったり、狩りをして、捨てるものも全部土に還ってゴミがなかったから地球に優しかった」と言う話が出た。保育者はそれを聞いて、「今の暮らしはどんなの？」と聞くと、「今は家が丈夫で、水道も車もコンビニもある」とロクに言うのである。現代の暮らしも良さそうに聞こえたので、「どっちが幸せなの？」と聞くと、力強く、「縄文！」という答えが返ってきた。

### ⑰縄文の幸せとは？

子どもたちが縄文に対して幸せだと思ったのはなぜだったのだろうか。子どもたちに「縄文の好きなところは何？」と聞いてみた。

まどか「縄文の忙しい毎日が好き」すみか「縄文のがんばってるところが好き」つむぎ「働くのが楽しい」  
こよみ「縄文のみんなが協力している暮らしが好き」いちか「自分たちで全部ががんばってるから好き」  
はじめ「オレは疲れるのが好き」はるたか「縄文の土器とかつくるのが忙しくて楽しい」  
けんしろう「作るのが好き 疲れた方が楽しい」ゆいと「火起こしとかあきらめないところ」  
ゆま「竪穴住居、土で靴が汚くなったけどそれでもやりたかった がんばってる場所」  
のぞみ「がんばっててあきらめなくて好き」

これは、全員で集まって聞いたのではなく、子どもたち一人一人に聞いていたことだった。しかし驚くほど、同じような視点だったのである。

#### (保育者の思い)

子どもたちにとって縄文とは、ものづくりに励んだだけやき組での毎日のことなのだと感じた。夢中になってものづくりに向き合う時間は忙しく、あきらめずに頑張ることは疲れるけれども、それが好き、それを幸せだと思っているのだ。子どもたちの思う幸せとは、自分たちの手や身体を使って、何かを生み出したり、それを使って暮らししたりする過程そのものなのであろう。

### ⑱由利さんからの返信

その日、子どもたちの話し合いの内容を由利さんにメールで報告した。すると下記のような返信がきた。  
～一部抜粋～

『素晴らしいです！！』

子どもたちが本気で話し合っている内容はとてもとても大事なことです。これから成長していく過程でも、ここで考えたこと、あるいは物事にどうやって取り組むのかということ学んだことは、とても尊いものだと思います。我々もつい『かたち』にとらわれてしまい、『本質』を見失いがちです。子どもたちにはそれらを冷静に見て自分で判断できる目を養ってほしいです。今回の竪穴式住居も成果としての建物ももちろんですが、そこまでこうして話し合った内容も大事な記録になると思います。

竪穴式住居はいつか朽ちてしまうかも知れませんが、子どもたちの記憶や経験は自分自身、そして、それぞれの周囲の人々に大きな影響を与えるんじゃないかと思っています。引き続き応援しています。必要な時はいつでも声がけください！』

#### (保育者の思い)

保育者と子どもたちだけでは、気づくことのない視点を投げかけてくださった由利さん。その由利さんのメールの中の本質をついた言葉の一つ一つが、これまで全力で縄文のあれこれに向き合ってきた子どもたちと重なり、保育者は涙が出てきてしまった。

この話し合いは、保育者が予想もつかない展開となった。子どもたちは、現代の暮らしが便利であることも知りながら、それでも縄文の人たちが自然の恵みから、自分の手や体を使って必要なものを作りだしながら暮らしていたことに価値を感じていることが分かった。保育者だけでなく、様々な視点を頂くことのできる方々の関わり的重要性を実感することができた。

### ⑲送りの儀式 (2月12日)

新しい竪穴住居を作るために、園庭が手狭になって他のクラスの子が遊ぶ場所が無くなるので、古い竪穴住居は壊そうと話合った。しかし、まどかが「どうしても、こわすのはいや」と涙を流していた。なかなか壊す決断ができない中、男児たちが「男の竪穴から壊すからいいよ。オレたち先に作ってたんだし」と言ってくれた。そして、男児の竪穴住居の解体作業を行った。はじめが「ここには、思い出がいっぱいつまってるな」と言い、保育者が「壊すのってあつという間だね」と言うと、はるたかが、「作るときは、今日はしようとか、柱をどうしようとか色々考えるのに時間かかったもんね」としみじみと言っていた。苦労して作った竪穴住居だったが、一日で、何も無い更地に戻ったのだ。

その頃保育者が、福島宮畑遺跡に行った際、「縄文時代、竪穴住居は古くなるか、持ち主がいなくなるかしたら、あえて住居を燃やしていたことが分かっている。使い終わった家を恵みをもたらしてくれる世界へ送る



感謝の儀式だったのでは」と教わったので、そのことを子どもたちに伝え、こよみが「じゃあ、わたしたちの竪穴も、送りのお祭りをするってのはどう？」と言った。それを聞いてまどかも、「それなら壊してもいい」と言い、みんなで送りの儀式をすることになった。

みんなで次の竪穴に使う材料を残して燃やし、土偶や土器も飾った。火も舞切り式火起こしで、自分たちで起こした。子どもたちは集まると自然と歌を歌い、踊っていた。そして最後は空を見上げていたのが印象的だった。

## ⑩大きい土器の完成 (2月5日～2月25日)

3学期になり、残された時間にも限りが見えてきた中、子どもたちが一生懸命大きい土器を目指して作っているのを見て、保育者もどうにかして子どもたちの願いを叶えられないかと、本などで調べていた。それでもなかなか思っている知識は得られなかったのだが、考古学の専門書※4の中に、発掘された土器の跡を見ると、大きいものはある程度作った段階で少し乾燥させ、次の部分を作るということを3段階くらいで行って、形が崩れないようにしていたと書いてあった。「この方法ならできるのではないかと」子どもたちに提案してみると、いちかが、「みんなで少しずつ作るの？」と言ったので、最後の挑戦になるかもしれず、みんなで一つのものを作ることになった。今まであんなに苦戦していたのに、この方法では、全く崩れることなく思っていたような大きな土器を作ることができたのである。はるたかは、「うれしくてたまらない」と表現していた。※4 可児通宏著「考古学研究調査ハンドブック②縄文土器の技法」同成社, 2005



### (保育者の思い)

本来なら、結果にこだわっていない子どもたちにとって、大きな土器を作ることが必ずしも必要であったかは分からないが、保育者も子どもたちと協働的に探究する者として、大きい土器がどうして作れないのか、縄文人はどうしていたのかは疑問でならなかった。辿り着いた文献の中にあつたことは、思ったよりも単純な原理であり、もう少し時間があつたならば、子どもたちも気付いたかもしれなかった。それだけに惜しかった気もしたが、子どもたちは、「縄文人ってやっぱりすごい」「ずっと何回も何回もやったんじゃないかな？」と話しており、先人の知恵に思いを馳せる機会になったのなら、それも一つの学びだったのではないかと、思うことができた。

### ～自分たちの土器でつくるスープ～

卒園までには間に合わなかったのだが、春休みに一日集まって(3月19日)、大型の土器でスープ作りをした。子どもたちが、「土器でスープを作りたい」とずっと言っていたからである。前日には、水が染み込まないように、目止めと呼ばれる「炭水化物などを水で溶いたものを沸騰させ、コーティングさせる作業」を行った。米粉を煮ただけの液体だったが、ぐつぐつと煮えてくると、子どもたちは「おいしそう。食べたい」と言い、試しによそってみると、「おいしい」「おいしい」と言って食べていた。自分たちの土器を使って食べるということが余程の喜びであつたのだろう。翌日、野菜のみではあつたが、スープを作ってみんなで食べた。「ほっぺた落ちそうだわ～」と何杯もおかわりの列に並ぶ姿が印象的だった。



## ⑪縄文のことを伝えたい (2月6日～3月8日)

卒園が近づいてきて、子どもたちが体験して分かったことを、みんなに伝えたいと話していた。伝えたいことはどんなことか聞き、それをつなぎ合わせて、3つの詩ができた。

### 「たいせつなもの」

縄文人はたいせつにしていた  
木も森も土も水も石も  
動物も木の実も仲間も自分も  
全部たいせつにしていた  
だって つくるため たべるため  
生きるため

### 「おくりのうた」

がんばってつくった 竪穴住居  
こわれてしまうのは かなしいけれど  
つくるのが たのしかった  
はたらくのが うれしかった  
縄文の竪穴は すてき  
土に還るところが すてき  
人も死んだら土に かえる  
こわれた竪穴も おなじ  
新しい木になって かえってきてね  
わたしたちのところに かえってきてね  
ありがとうのきもちを 天にとどけたい

### 「縄文のひとたちへ」

今はどうしていますか？  
わたしたちは今、  
土器とか竪穴とかいっぱい作りたいから  
教えてほしい  
どうやって木を運んだの？  
どうやって高いところに縄を結んだの？  
どうやって土器に細かい模様をつけたの？  
心に聞いてみる  
もう、会えないけど 思い浮かべたら会える  
心にはいるから

これらをどうやって表現するのか、保育者は分からなかった。しかし、子どもたちは、「わたしは土になりたい」「オレは石になる」と「木、森、土、水、石、木の実、動物、人間」と自然のものになりきって、歌ったり、踊ったりし始めた。

この表現活動は、本当にどこまでも子どもたちの手作りで行われ、衣装も自分たちで考えて、保育者は材料を用意しただけで、裁縫等もして作っていた。また、背景に竪穴住居の絵も飾りたいと言って、下書きから色塗りまで、すべて子どもたちで作り上げた。そして、2週間ほどで、園の子どもと保育者全員に披露した。拍手がなりやまず、「おわりです」と言っても誰も帰らないので、質問コーナーをした。その一つ一つに丁寧に答えていた子どもたちだった。その中で、一つだけ答えられなかった質問があった。年中児からの質問で「森はどうやって大切にするんですか？」というものだ。これには、子どもたちが黙ってしまったので、持ち帰ってまた後日返答することになった。



### (保育者の思い)

縄文時代のことを伝えたいと子どもたちが言ったので、竪穴住居や土器の作り方を伝えるなどを想像していた。しかし、実際は、子どもたちは自分たちが体験してきた中で、もっと本質的なものをつかんでいたということなのだろう。そんな子どもたちが、年中児からの「森はどうやって大切にするんですか？」の質問に黙ってしまったことをなぜだろうと考えた。子どもたちは、保育者が思う以上に深く「縄文のこと」「自然のこと」を考えているのではないかと。だからこそ、安易に答えを言うことはしなかったのではないだろうか。もうこの時期には、保育者の方が子どもたちに置いて行かれぬよう、ついていくのが精一杯という状態であった。

### ②丸太が見つからない (2月26日)

竪穴住居の話し合いの後、長持ちはしないかもしれないけれど、自分たちのできる範囲で新しい竪穴住居を作ろうと張り切っていた子どもたち。けれども、竪穴住居を作るために頼んでいた丸太がなかなか来なかった。子どもたちも、「いつ来るの？大丈夫かな？」と言い出した。りのんは、「いつくるんですかってメールして何日、何時にくるんですかって何度もメールした方がいいよ。できれば明日にしてくださいって言った方がいいと思う」とのこと。頼んでいた業者にメールをしてみると、『竪穴式住居の木材でしたが、山形の業者様からすいませんがご用意出来ませんとの事でお返事がありました。志津川の木材屋さんにも昨日催促のお電話しておりますので、お返事待ちたいと思います』との返事を頂いた。卒園まであと2週間。丸太の入手の目途がたっていない状況に、焦った保育者は、子どもたちにそのことを伝えた。

保育者「丸太が見つからないんだって。遠い、山形っていうところに電話して、2つも木材屋さんに聞いたのに栗の木はないよって言われちゃったんだって。今、もう一つの志津川っていうところにも聞いてくれているけど、まだお返事がないんだって」

子たち「えー」

保育者「縄文時代はどうしてたんだろうね？」

りく「縄文人は自分たちで探して切って持って帰るのも自分たちだったと思うよ。歩いて行けるとこの森から木を取ってたんだよ。それか、自分たちで種植えてそれでまた木が生えて森にしていたと思う」

あい「縄文人は木を大切にしていたから竪穴住居も作れたんじゃない？」

のぞみ「縄文人は土とか水とかも大切にしていたから、木がいっぱいあったんだと思う」

ゆう「土とか水とか大事に使っていたから土も水もきれいになっていたと思うから、木が元気だったと思う」

### (保育者の思い)

丸太が見つからないと連絡が来て、保育者はこのことと、どう向き合う必要があるだろうと考えていた。子どもたちが言うように、縄文人は木も森も土も水も大切にしていたのであろう。では、今はどうなのだろうか？答えは見えないが、真剣に考えなくてはならないものに直面したように思った。

### ③丸太が見つかった…しかし由利さんからの新しい問い (3月3日)

ところが、その日の午後、「丸太が見つかりました！」と連絡があり、由利さんも園に来てくださった。志津川の木材屋さんが探してくださり、山の上はまだ若い栗の木があったそうで、20本、切ってくださったとのこと。「よっしゃー！」と喜んでいただけましたが、由利さんからまた新しい問いがあった。

由利さん「みんなは縄文と同じ竪穴住居を作ったんだよね」

「みんなは縄文人みたいになりたいと言って、縄文の竪穴を建てたいと言っていたよね」

「コンクリートも防水シートも使いたくないと言ってたよね」

「でも、栗の木を誰かに切ってもらって、わざわざ二酸化炭素まで出して、トラックで運んでくるのを待てるだけというのは、縄文人と同じなのかな？」

「みんなは、見た目が縄文の竪穴住居と同じものを作ったの？それなら、コンクリートを使っても良かったんじゃない？」

「みんなが大切にしたいことは何ですか？」

この問いには、いつも次々と意見を出す子どもたちも、黙ってしまった。ポツポツと「栗の木、ほしいけどな」「竪穴住居建てたいんだよ」「ぼくたちは、縄文が大好きなんですよ」などと言うものの、すぐには答えが出ない状態だった。それはもちろん保育者も同じであった。栗の木を頼む関係で、明日の10時までに結論が欲しいとのことで、翌日の朝また話し合うことになった。実は、由利さんは設計士だが、地球環境のことも真剣に考えて、夏もエアコンを使わずに仕事をしたり、冬も厚着をして暖房を使わないなど徹底しているという話を聞いたことがある。だからこそ、子どもたちにも真剣に考えてほしいと思ったのだろう。しかし、とても難しい問いであり、子どもたちは、栗の木で竪穴住居を作りたい気持ちと、縄文人らしい竪穴住居を作るこ

との間で揺れていた。

### (保育者の思い)

栗の木が見つかってよかったと思ったのも束の間、由利さんからの新しい問いには、保育者も、相当に頭を悩ませた。自分たちは、何のために竪穴住居を作りたかったのか、子どもたちに何を体験させたかったのか…今考えると、由利さんが「子どもだから」と難しいことを避けるのではなく、子どもたちのことを信頼して真剣に向き合ってくださったからこそ、学びが深いものになったことを感じる。由利さんから頂いた問いは、人間と自然の関係を考えなければならない。文献を読んだり※5・6、周囲の人に意見を聞いたりしながら、正解のないこのことを子どもと一緒に考え続けた。担任保育者同士でも、「どうなることがいいんだろうね」と、本気で話し合っていた。子どもたちが、保育者の話し合いを傍で聞き、「ケンカしてんのかな?」「ちがうよ、話し合ってたよ」などと言いつつ合っている姿もあった。大人たちも真剣に考えている、そのことは子どもたちにも伝わっているようだった。

※5 渋沢寿一著「人は自然の一部である」地脇の杜, 2023

※6 森田真生著「僕たちはどう生きるか めぐる季節と「再生」の物語」集英社文庫, 2024

### ㊤オレたち失敗しちゃった (3月3日)

話し合った日の夕方

はじめ「切っちゃった栗の木ってまだ赤ちゃんだったってこと?」

保育者「それは分からないけど、まだ若い木だったんだろうね」

はじめ「やっちゃったなあ、オレたち、森を大切にして言ったのに、赤ちゃんの木を切っちゃったのか」

はるか「それは失敗だったな。森の無駄づかいしちゃった」

はじめ「竪穴、竪穴って言って、自然の方が大切なのに。オレたち、(自分の)家もあんのに」

ゆうと「でもさ、赤ちゃんの木って見えないから分かんなかった」

はじめ「自分たちで行けばよかったんだよね」

けんしろう「でも遠いじゃん。散歩じゃいけないでしょ」

はじめ「じゃあ、電話とかすればよかった。写真とか見せてもらえばよかった。まかせっぱなしにしちゃったからな」

ゆうと「それも失敗だったなあ。オレたち2個の失敗しちゃったんだよ」

### (保育者の思い)

子どもたちの話を聞きながら、子どもより、保育者が木を探すことを人任せにして、情報を収集することもしなかったことこそ、反省しなければならないと感じた。しかし、このことがあって、今は電話一本で、またはインターネットで何でも手に入るが、本当は何かを手に入れることはどういうことなのか、子どもたちも保育者も考える機会になった。

### ㊥栗の木をどうするのか (3月4日)

翌日、子どもたちとさらに話し合った。

はるか「栗の木をもう切ってしまったなら、もったいないから使いたい」

はじめ「トラックで運んでもらうのは、縄文人らしくはないけど」

ゆうのすけ「じゃあ、俺たちが歩いて運べる場所までトラックでもってきてもらうのは?」

まなと「でもさ、栗の木が他のものになって、その方が栗の木のためなら、そっちの方がいいから、自分たちはあきらめてもいいかも」

～その場で由利さんにメールで聞いてみると、すぐに返信が来る～

由利さん「乾かしてから、どう使われるかは分からないけど、いずれは、何かにはできると思います」

～園長にも聞いてみる～

園長「家に使うにはもっと年数が経った木じゃないとダメかもしれないけど、椅子とかテーブルとかには使われると思うよ」

はじめ「他の人の椅子になるなら、自分たちの竪穴住居に使いたい」

はるか「椅子にするのもトラックで運ぶなら、二酸化炭素同じじゃない? だったら、自分たちで使いたい。本当はトラックじゃないのが良かったけど、木をもう切ってるから」

つかさ「絶対、栗の木も竪穴住居になることは喜ぶと思う」

あい「竪穴住居はみどりの森の子どもに使ってもらえるから」

げん「栗の木は切る前、土に生えてるでしょ。竪穴住居は土の上に建てられるからうれしいんじゃない?」

ゆうのすけ「雨が降って水も飲めるしね」

まなと「椅子とかにした時は壊れたら捨てられちゃうかもしれない。竪穴住居なら壊れて土になるから、それも木のためだよ。土に還るってことは、土の中で生きることだから」

さつき「栗の木さんに来てもらって、ありがとうの気持ちを栗の木に届けたい」

～賛成意見が次々出て、時間ギリギリで栗の木を頼むことに決まった～

たくさん考えての結論を報告すると、由利さんも認めてくださっていた。子どもたちは「ワクワクだね」と言って栗の木の到着を心待ちにしていた。午後には、子どもたちが竪穴に集まり、栗の木をすぐにでも迎えられるよう準備を始めていた。その中で、「オレたちの中で誰が一番船長か」という言い合いになった。これは、「誰がリーダーになるか」ということで、子どもたちはそれを「一番船長」と呼んでいる。「一番船長はオレだ」「いや、オレだ」と言い合った後に、「ちがうよ、竪穴の一番船長は、栗の木さんだよ」とけんしろうが言いだし、他の子ども、「あ、そっか、そうだよ」と言っていた。翌日、切った丸太の写真がメールで送られてきたので、子どもたちに見せた。子どもたちは、どの子どもパツと目を輝かせ、「うわ～～」と歓声をあげ、「かわいい」などという声も聞かれていた。

## (保育者の思い)

順調に栗の木が届いたなら、こんなふうに栗の木が自分たちのところに来てくれる意味を考え、栗の木の気持ちになって、心からの感謝をすることはできなかったと思う。このことを通し、子どもたちは「自然の声を聞こうとした」ということではないだろうか。大人も答えの分からない問題に対し、一生懸命考え続ける姿勢には保育者の方が教えられることばかりであった。

## ④栗の木が到着 (3月8日～14日)

卒園まであと1週間というところで、丸太が到着した。子どもたちは重い丸太を一生懸命運んだり、みんなで丸太を支えて立てたりしていた。

その日の午後から、早速竪穴住居作りが始まった。卒園まで1週間であるが、子どもたちに焦る様子は無かった。これまでの竪穴住居作りと同じスタイルで、その時にやりたい子どもが作業したり、違う遊びをして戻って来たりしながら、「楽しい」「楽しい」と作業していた。担任保育者も最後の協働作業と一緒に楽しんだ。保育者は、卒園まで完成しなかったとしても、仕方がないと思っていた。しかし、これまでに建て方の手順を何度も話し合っただけでシミュレーションしていたことや、枝をノコギリで切る、縄を結ぶなどの経験をたくさん積んでいたことで、竪穴住居は1週間以内に形になった。しかし、子どもたちに、もう完成として良いか聞いてみると、卒園式前日にも「まだ完成じゃない!」と言った。子どもたちは、完成させたくなかったのかもしれない。とは言え、だいたい形になったので、卒園前に他クラスにも「入っていいよ」と伝え、みんなに竪穴住居を贈呈することになった。いつまで建てられるかは分からないけれど、たとえ朽ちてしまったとしても、命は循環していくこと、思い出は残り続けるということを心に刻んでいる子どもたちだ。

最後に年中児からの質問「どうやって森を大切にするか」を聞いてみた。子どもたちは、いろいろと考えていたが、「やっぱり、木も土も水も動物も木の実も全部大切にすることじゃない?」「人間だけじゃなくて」と話していた。



## 最後に…

子どもたちは、大好きな土粘土遊びから縄文時代に興味を持ち、自分の手や身体を使って「ものづくり」に励んできた。土器や土偶づくり、竪穴住居づくり。論文には書ききれなかったが、どんぐりを加工してパンを作ったり、茅でゴザを編んだり、原始的な火起こしにも挑戦した。子どもたちは、縄文の「ものづくり」を通して、自分の手で何かを生み出し、それを使って暮らすことの喜びを感じていた。結果ではなく、その過程にこそ意味を見出し、それを幸せと表現した。

子どもたちが縄文のことを教えたいと言って作った詩の中には、たくさんの感じたことや、学んだことが表れていた。「縄文時代は、木も森も土も水も動物も木の実も仲間も自分も大切にしていた」この言葉からは、子どもたちが縄文時代が、自然と共生していた時代であると肌で感じたことが表れている。しかし、自然を大切にす、自分も自然の中の一つとして生きるとはどういうことなのか?大人も分からない問いを子どもたちは、考え続けていた。竪穴住居を建てたいという子どもたちの思いと若い栗の木を切ってしまったことの間で葛藤し、最後は、栗の木のことを生きている存在として思いを寄せ、栗の木にとってどうであろうか、栗の木の立場になって考えようとしていた。そして、それこそが「森を大切にす」「自然と共に生きる」ことなのだという自分たちなりの答えに達していった。

子どもたちが卒園し、5月のこと。新しくけやき組になった子どもたちが、「竪穴住居に葉っぱでた!」と嬉しそうに教えてくれた。竪穴住居を見に行ってみると、柱として建てていた栗の木から芽が出ていたのである。柱にするために切ってしまった若い栗の木。根はないはずなのに、芽が出ていることに驚いてには信じがたく、何度も確認してしまった。思い返せば、栗の木を迎える際、子どもたちが「栗の木は切る前、土に生えてるでしょ。竪穴住居は土の上に建てられるからうれしいんじゃない?」「雨が降って水も飲めるしね」と話していた。保育者たちは、子どもたちの発想に感心しつつも、一度切ってしまった木が水を飲むことはできないだろうと思っていた。しかし、子どもたちが言うように、丸太が土から水分や栄養を吸って芽を出したということであろうか。「栗の木は自分たちの竪穴住居に使われるほうが幸せにできる」と言っていた子どもたちの言葉がよみがえってきた。

子どもたちから、たくさんのことを学ばせてもらった。大人が到底思いつくことのない答えを導き出した子どもたちに、心から尊敬の気持ちでいっぱいである。



## IV研究まとめ

### (1) 科学する心が育つ時

#### ①身近な自然の恵みを感じる日々の中で育まれるもの

本園では、これまでの「科学する心」の研究の中で、「子どもと自然との関わりが不可欠である」という結論に達し、自然に触れることのできる環境を大切に考えてきた。前述したように、本園は市街地であって、自然に恵まれた環境とは言えないが、その中でもできる限りの環境と保育内容の工夫を試みてきた。子どもたちは、日々、身近な自然の恵みを頂きながら遊んだり、生活したりする経験をしている。実践事例のけやき組の子どもたちも、低年齢の頃から土や泥、水だけでなく、花や虫、木の実や石、影や光などにも興味を持ち遊び

の中に取り入れていた。由利設計士から「土に還る家」と聞いてすぐに意味を理解した子どもたちだが、それまでの体験がなければ難しいことであっただろう。また、栗の木の立場に立って考えたり、「縄文人は木も森も土も水も石も動物も木の実も仲間も自分も全部たいせつにしていた」の言葉からは、人間が他の生命によって生きているということを感じていると感ぜられる。実践事例は、保育目標の一つである「自分自身が地球の中の自然のひとつだということを感じられる」を達成したと言える。また、このことは、世界が目標としている持続可能な社会の作り手を育てることに通じることでもある。これは「科学する心」を育てる保育を一貫して目指してきたことから到達した姿とも言えるのではないか。

### ②子どもの主体的な興味から始まる必然性の連続

この一年の実践事例は、子どもたちの主体的な興味から始まった。そして、その後の展開は、子どもたちにとっての必然性の連なりであった。一つ一つの活動には子どもたち側の動機があったのである。その中には、保育者があらかじめゴールを設定する活動の中では得られない学びがたくさんあった。良質な土粘土が作りたい、大きな土器が作りたい、竪穴住居を思い出として残したい…など、一つの動機が達成されると、また次のやりたいことが見つかった。保育者は、その展開を予測して環境をいくつか準備したが、そのどれもが予想通りにいかないこともあった。しかし、子どもたちの思いにしたがって、即座に軌道修正してきた。例えば、縄文の森を見学したその日の午後には、子どもたちが竪穴を掘り始めた。さらに、時間を置かずに2つ目の竪穴まで掘り始めてしまう。このことは、保育者は予想できなかったことであり、その思いの強さを感じ、園庭が手狭になることを、他のクラスの保育者にも了解を得て、子どもたちの活動を見守ることにした。最後に栗の木がなかなか見つからなかったことも、保育者はどうすることが子どもたちにとって良いのか、様々な結論を予想はしたが、それを超えて子どもたちは、力強く自分たちの結論を導き出した。このようなことが繰り返され、学びの連なりが途切れずに続いていった。保育者は、常に子どもたちの次なる動機に敏感でなければならず、必要なのは計画以上に今現在の子どものたちを見ることであり、それが「科学する心」を育むことに繋がったと感じる。

### ③子どもの可能性の豊かさを信じる

本園は、「科学する心」に焦点を当てた研究の中で「本物の体験」の重要性を確認してきた。今回の実践事例を検証していくと、まさに本物の体験となったのではないだろうか。時に、幼児に対して、ここまでの体験が必要なのかという質問を頂くこともある。しかし、幼児期だからこそ、必要であると考えている。そのように考えるのは、これまでの「科学する心」を軸とした研究の積み重ねにより、子どもたちの可能性への信頼が確立されていることが大きい。実践事例の中でも、子どもたちは、自分たちで上質な粘土の作り方を編み出し、土器や竪穴住居を作り、その体験を通して、生命の循環や自然との共生について考えた。このような姿を目の当たりにした保育者は、子どもたちの持っている可能性の豊かさに目を見張る。そして、そんな子どもたちが日々、感じていることや考えていることを一つも取りこぼさず知りたいと思う。目線やしぐさ、つぶやきの一つ一つが尊いものとなり、規制したり制止したりすることは、できる限りしたくないと思うようになるのである。手渡す環境も中途半端なものでは、子どもたちは納得しないだろうと思っている。子どもたちの持つ力を信頼し、低年齢の頃から、本物の体験を大切に考え、子どもが感じていることを読み取ることが、さらに「科学する心」を育てていくことを確認できた。

### ④保育者も協働の探究者

子どもにとって、自由で主体的な遊びが十分に保障されると共に、保育者も子どもと共に考え、学ぶ存在であるということも「科学する心」を育む上で大切なことであった。若い保育者が、「土粘土探しは、宝探しなんです」と語っていた時には、子どもと同じ目線で楽しみを感じていたに違いない。子どもたちが土器作りに夢中になったり、「昔の人みたいに暮らしてみたい」と言った時は、子どもたちは何に魅力を感じ、何をやってみたいと思っているのか、保育者も懸命にそれを探っていた。子どもたちが、「土器に水を入れて飲みたい」「大きい土器を作りたい」「竪穴住居を作りたい」と言った時には、保育者も「こうやってみたらどうか」と意見を出すこともあったし、「栗の木をどうすることが良いのか」考えていた時には、保育者の考えを超えた子どもたちの意見に心底驚かされた。その都度、子どもと保育者の立ち位置は変わっていたが、常に協働の探究者であった。子どもと保育者の本気の探究は、常にお互いを刺激し合い、高め合ってきたように感じられた。子どもも保育者も主体となって過ごす中で、「科学する心」が育まれるのであろう。

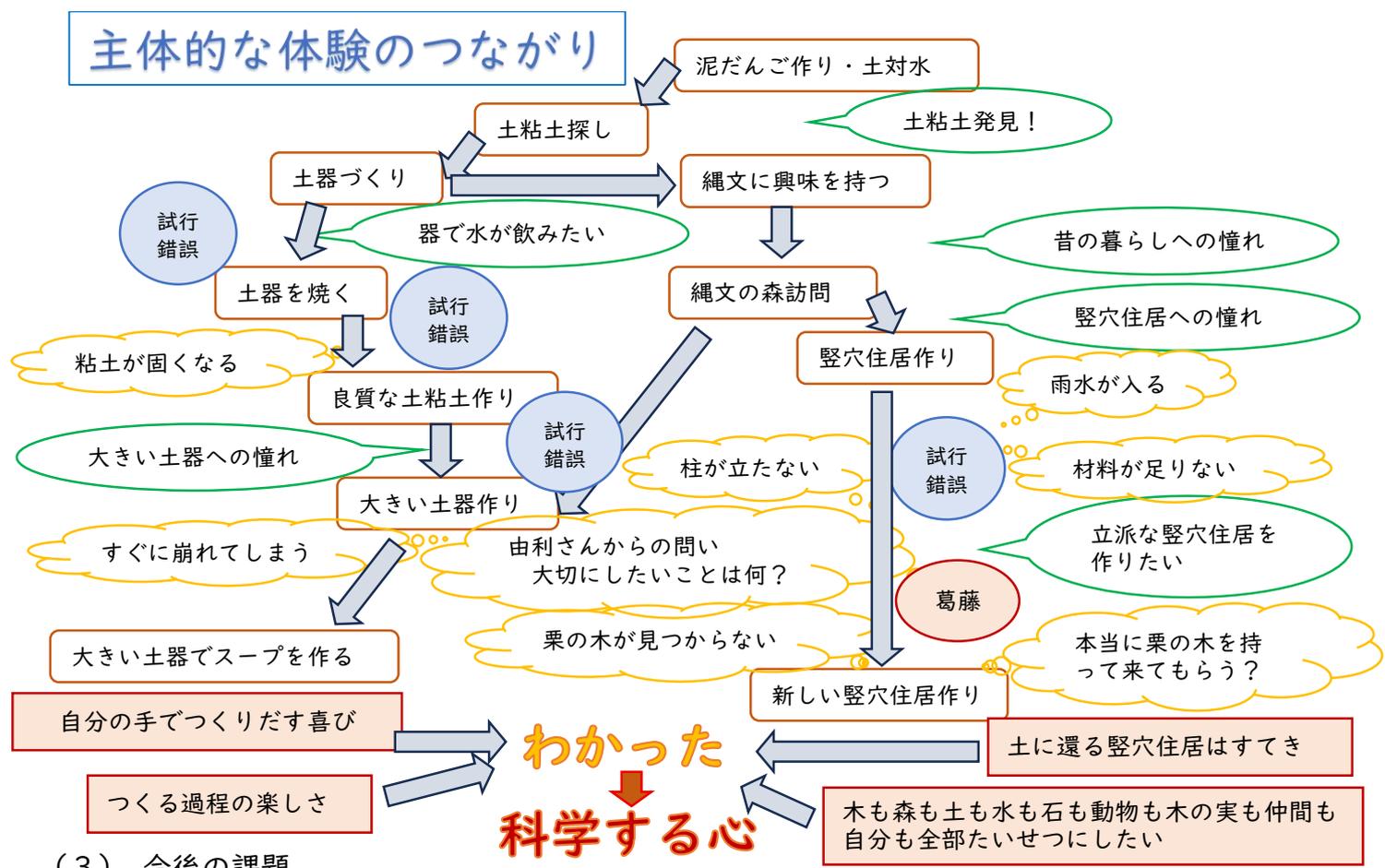
### ⑤子どもを見守るコミュニティの中で

本園では、保育者だけでなく、園に関わる様々な人々と繋がりながら保育を進めてきている。この実践を振り返ると、由利設計士と子どもたちの出会いが大きな意味をもたらしたことは間違いない。由利さんには、姉妹園を設計してもらい、園の改築や増築にも毎回関わって頂いていたが、「近くまで来たから」と園の様子を見に来てくださることもあった。子どもたちの遊ぶ姿を見ながら、「幼児期の子どもたちは、こんなにもやりたいことがあって、そのやりたいことをどんどん形にするのですよね。大人になっても、ずっとこうであってほしい」などと仰っていることもあった。子どもたちの成長を共に見守ってくださっていると感じていた。これまでも、プロジェクト活動などで、壁にぶつかった時、園外の方に意見をうかがってきいていたが、今回、子どもたちが、卒園前に竪穴住居作りに行き詰った時、すぐに由利さんが浮かび、お話を聞きたいと思った。しかし、由利さんの問いかけは、私たち保育者も想像していないものであった。「本当に大切にしたいことは何か」子どもだけでなく、保育者も真剣に考えなくてはならない本質に迫った問いであった。さらに、ようやく栗の木が見つかり、これで竪穴住居が作れると思った時にも、由利さんから、「本当にそれで良いのか」と問われたのである。由利さんが、子どものことを一人の人間として尊重しているからこそ、まっすぐに向けられた問いであると感じた。子どもだからこそ、答えのないこの問いを考えてほしいと思ったのではないだろうか。子ども

もたちは真剣に考え、自分たちなりの答えを出した。「土に還る竪穴住居をつくりたい」「栗の木さんにとって、どっちがいいのだろう」「森を大事にするってことは、木も土も水も動物も木の実も全部大切にすること。人だけじゃなくて」…大人が思いもよらなかった答えに、私たちの子どもたちへの信頼は、より一層強いものとなった。「科学する心」は、園の保育者だけでなく、子どもたちを中心に語ることでできるコミュニティの中でより熟成されていくということを再確認することができた。

(2) 事例を通して考える科学する心の芽生えとは

『自然から生み出す「ものづくり」の喜びがもたらす科学する心の芽生えとは』のテーマで一年間の実践を考察した。子どもたちは、土粘土探しから、縄文時代の暮らしに魅せられていった。子どもたちの興味関心は途切れることを知らず、壁にぶつかっても自分たちで試行錯誤しながら乗り越えていった。そして、その過程そのものに価値を見出し「楽しい」と話した。一方で、答えのない問いにもたくさん向き合った。「自分たちの本当に大切にしたいことは何か」「どうしたら、自然を大切にしていると言えるのか」子どもたちが、考え出した答えは、まさに生命の循環と自然との共生であった。栗の木の立場になりきって考えることができ、自分たちだけでない、たくさんの自然の生命の存在に気付き、そのどれもが大切であるとわかった子どもたち。この「わかった」は、土に触れ、土器を見つめ、穴を掘って木を組み立て、縄を結んでものづくりをした一年で学んだ「わかった」である。これこそが、幼児期における「科学する心の芽生え」とであると確信するものである。



(3) 今後の課題

これまで、「科学する心」を育む保育の研究を積み重ねてきたことは、次第に園の文化となり、醸成されていった。子どもたちの豊かな育ちは、保育者にとって次の保育への原動力となり、新たな科学の芽を育むことに繋がっている。「科学する心を育てる」という一貫したテーマが保育を支えてきたように思う。

幼児期を豊かな体験を通して科学の芽を育んだ子どもたちは、園を巣立ち、小学校での学びへと続いていく。園で大切に考えてきた「科学する心」の視点を小学校以上の教育に携わる方々にも伝え、分かり合うことの必要性を切実に感じている。「科学する心」という一つの視点があれば、つながり合うことができるのではないか、同じまなざしで子どもたちを育むことができるのではないかと、このことにこれから私たちは真剣に取り組んでいきたい。

最後に、子どもたちにたくさんの示唆を与えてくれた由利さんがR7年6月13日に突然の病でこの世を去った。子どもたちに残してくれた言葉はそのまま由利さんの遺言となり、私たちの心に深く刻まれることとなってしまった。由利さんの残した様々な示唆を今後ずっと語り継いでいきたい。

※本文中の子ども名前は、保護者の了承を得て記載しています。

研究代表 藤澤 友香子 研究同人 大江 文 菊池 恵友 小島 芳